

「空腹がつつてくると口のなかより焰が出る。」

これは経験のない人には理解してもらえない。

復員後は会津若松の養母のもとへ帰って、会津漆器の塗師となり生活した。

海軍志願兵の思い出話

茨城県 大山 松重

私は帝国海軍軍人として、昭和十六年五月一日横須賀第一海兵団へ志願、入隊しました。その当時、私の家庭の状態は、家業は農業で家族は父、母、兄二人、私、弟一人、妹一人の七人家族で、全員健康であり、農業は中流の規模で田畑あわせて約五町歩、生産品は主として米、粟でありました。

当時の世相として、若い男子が早く軍人となって国家のために戦争にでることを奨励する運動が盛んであったので、家庭の状態から考えて、私が一人軍隊へはいることはゆるされる条件であった。まだ十六歳の少年が勇躍

入隊、四等機関兵が生まれました。

昭和十六年五月一日、海兵団入隊後、四か月間を、横須賀で新兵教育で過ごし、九月より支那方面艦隊（上海にいた）へ配属され、特設砲艦「第一〇雲海丸」に乗船、支那方面沿岸、杭州湾の舟山列島の警備につきました。

毎日の業務は機関の釜たき兵で石炭の投入です。たいへんきつい仕事で、夏は四十度の酷暑ですから、重曹水をわきへ置いて頑張りました。勤務は四時間こうたい、一日二回勤務、三こうたいでした。勤務外の時間は洗濯、甲板掃除等で休む間もなく、目のまわるような忙しい毎日でした。

大東亜戦争へ突入するや、艦内にも緊張のどあいが強まり、昭和十七年一月玉環島へ敵前上陸をしました。七・七ミリ機銃の弾丸一千発を背中へおい、胴の前後に百八十発を携帯し、重い荷物で身の自由もできないくらいでした。

上陸用舟艇にいじょうし、煙幕を張り、重い弾薬を背負い、目指す島へと向かう時の気持はさすがに軍人とはいえ、（新兵として）なんともいえないものでありまし

た。やがて上陸用舟艇より海中へおりて、腰まで水にぬれて上陸しました。攻撃に際しては、あらかじめ友軍の飛行機で宣伝ビラを撒いてあったためか、敵の抵抗はなく、一発も撃たれず無血占領でした。

兵力は各砲艦には約六十人の乗組員がいるので、それから抽出した分と、上海陸戦隊との合同の混成部隊でした。島に残っている住民はすべて老人ばかりで、若い者はすべて逃げたのか一人もみなかった。玉環島での任務は歩哨、見張り、家宅搜索等で、二泊して帰艦しました。今から考えると実戦とはいえ、楽な作戦でした。

そして上海へ帰り、引き続き警備の任に服しました。敵の潜水艦の警備、米軍商船（日本軍の飛行機により攻撃されて座礁中の船）の警備、シンガポールより上海へ部隊を積んで来た船が、米潜水艦の魚雷を受けて半分水没したのを、ウースンまでえいこうしたとか、格別のことはありません。

昭和十八年六月まで上海にいました。ついで横須賀の工機学校普通科入学を命じられ、六か月間教育を受けた。内容は内火エンジン（潜水艦の）。引き続き広島県大

竹の潜水学校普通科へ移った。昭和十九年正月入校、六か月後卒業。横須賀の潜水艦基地へ配属された。

つぎの艦へ乗組の待機をしている間、毎日防空壕ほりをした（その頃アメリカの第一回目の東京空襲があったので。アメリカの空母より発進したB25が東京、大阪等へ小規模の空爆をして支那大陸へ逃げこんだ）。

そのうちに、イ号百三十号潜水艦の艦装工事要員として神戸市に移る予定のところ、直前になり広島県大竹の潜水学校高等科へ第一期生として入校し、六か月後卒業した。昭和二十年六月か七月ごろと思う。

つぎにトラック島の第六艦隊司令部へ移る命令が来たが、トラック島へ行く船便がない。そのため、山口県柳井の特殊潜航艇（人間魚雷―特攻隊）の基地へ行き、特潜の機械科の教員をしておるあいだに終戦となった。

終戦秘話として悲しい思い出は、兵学校出の五人の若い士官が切腹自決をしたことである。

終戦の八月練習生を早く帰して、私たちは八月二十一日出発、復員旅行にできました。厚木の飛行場へアメリカ軍が進駐してくるため、部隊の解散を忙しくおこなった

わけです。

二十九日京都へ一泊。三十日茨城県の自宅へ無事復員したしいです。

実役は四年と四か月ぐらいいと思います。帰宅すれば家族は皆元気で

「よく元気で帰ってめでたい。めでたい。」

と喜んでむかえてくれました。昭和二十四年結婚し、二十八年粘土瓦製造販売を始め順調に経過して現在に至っております。

回顧して軍隊にいた間のつらくて悲しいことは、やはり第一にお説教、制裁です。私は一番多くやられたのは一週間に三十あまりです。

「気合いがたるんでる」との理由で、精神修養棒と称する野球のバット状の棒で尻を思い切りたたかれます。それも上級者から順次に下級へと来て、一等からまた二等からというわけで階級がかわる人からそのつどやられました。もうたまりません。

洗濯はたいたい夜の十時ごろからで、室内へ干しておくとよくぬすまれます。上級者のものをぬすまれるとま

たやられる。海軍の善行章は三年無事に勤めあげること一本あたえられる。昔の職人の年期のようなものです。最初の三年の間は各種の作業をする間上級者の指導監督が一つ一つあります。

三年へて善行章がつくと監督なしで仕事が出来ます。

私は善行章一本でした。しかもつぎつぎと新兵があとから入隊してくれば楽になれるけれど、私の場合はあとからくる新兵がおらぬので終始なぐられ放しで、ぎやくになぐったことがない。

つらかった、つらかった。あまりつらいので自殺をはかったことが二回もあった。その第一回は砲艦の新兵時代、風呂場で首つりを考えたが、親のことを考え、一期早い古兵にはげまされて無事にすんだ。第二回は工機学校へはいり二等兵となり、休暇で自宅へ帰り食べすぎ、帰校後下痢がつづいてかくりされた。そのため教育は受けられず受験もかなわず、「隊へ帰れ」といわれていくらあやまっても許してくれない。もうたいへんつらくていっそ死んでやろうと思いつめたことがある。

以上の二回も自殺を思い立ったことは、つらいことの

代表的な思い出としてのこっている。

そのほかにも艦内の勤務でのしんくは、古い人ばかりで自分より下の新兵がいない。年中いつもどこでも監視がつづいて、少しものんびりできないこと。食事等も汁かけ飯（小さい食器の飯を、大きい食器の汁の中へ移してかきまぜて、急いでかきこむ）を中腰の姿勢で早く早くと食べる状態である。うえの人が茶がなくて、パンパンと湯のみをはたこうものならそく罰である。あるいはぶれいこうと称して酒をのませよわせて、あとで甲板洗いやら各種の仕事を命ぜられる。苦しいことこのうえない。それも何回かやって要領がわかったから、あとでは楽になった。

また、年とともに昇進して下士官になってもいつも一番若いので下がおらぬからつらいことでした。

楽しかったことは柳井の特潜学校時代に下宿のじいさん、ばあさん（外国帰り）に子供がなくて若い軍人をおかわいがってくれ、よく鰻の蒲焼等を御馳走してくれたら、近所に済む小学校長の娘三姉妹にもてたりしたものです。

私がいく予定で結局はいかなかった潜水艦の機装にいった人は全部死んだんだそうです。

機装がかわり出げきして、瀬戸内海を出て外洋へ出たとたん米潜に魚雷攻撃されて全滅した由。水中聴音機やレーダー等敵にはすぐれた兵器があつて同じ潜水艦同志でもたちうち出来なかつた。

私はさいわいにも潜水艦に乗らなくて助かり、またトラック島へ行けなくて全滅玉碎をまぬがれ生きのこるなど二回も死神からにげて武運長久でありました。

もう一つ艦内生活では南京虫にかまれました。有効な薬品もいまだない時代で、もうかまればうだいでした。ねずみはほとんどいなくて一匹つかまえると外泊の賞がつきましたが、私はその恩恵にはあずからなかつた。

工具をあつかう場合、モンキーのことを海軍用語では自在スパナといいましたが、この名前のことで最初はさんざん苦しめられました。洗濯物をよくぬすまれたり、ぎやくにぬすみかえしたりしましたが、海軍ではぬすんだ者をドロボーといい、ぬすまれた方をベラボーといったりしました。

今、回顧すると苦しい悲しい思い出ばかりが懐かしく感じられますが、その苦しい体験をバネに活用して戦後の再建に「何羹これしきのこと」と、常に悪い条件をはね返して成功へと頑張れたことはえがたい貴重な収穫であったと感じています。

駆逐艦「五月雨」

茨城県 渡 辺 善 夫

—渡辺さんは海軍の昭和十七年五月志願だとのことですが、先ず海兵団入団の時の概要を聞かせて下さい。

私は大正十三年の十二月二十三日生まれでした。昭和十五年までは、海軍の徴兵は一月十日、志願は六月一日だったのですが、十六年からは、一月徴兵、五月志願、九月志願と徴兵と年三回になったわけです。そして、制度として、徴兵は現役三か年、志願五年だったのです。

私は昭和十七年五月、横須賀の楠か浦第一海兵団に入団したのです（今その建物は米海軍が使っている）。八月十五日に基礎教育を卒業したが、卒業後全部がどこかへ配属されるわけで、私は『駆逐艦「五月雨」乗り込みを命ず』ということでした。

八月十六日、呉の海兵団へ仮入団のため「隊伍陸行（汽車で行くこと）」しました。その時、「五月雨」「春雨」「村雨」「夕立」の四隻で第二駆逐隊を編成していたこのことです。その時、乗り組みを命ぜられた「五月雨」はソロモン諸島におりました。

九月の末、「サクラメンテ丸」という油槽船に便乗して、先ず南洋群島のトラック島へ行ったのですが約一週間かかったのです。そこでこんどは特務船「間宮」に移乗し一週間、その後、二等巡洋艦「由良」へびんじょうして、ガダルカナル島のでまえのショートランド島につきました。ショートランドは海軍の前線基地で、珊瑚海海戦が終わって、艦隊が帰って来た時でした。十七年十月十六日、そこで「五月雨」へ乗ったのです。

—いよいよ、連合艦隊の最前線で、ガダルカナル攻防